資料５

＜小中一貫教育の成果と課題（生駒北小学校）＞

※成　果

●児童アンケート・保護者アンケート・教職員自己評価より

1、中学校の定期試験前一週間を、トライ・ウィーク（小学生が家庭での自主学習に力を入れる期間）とし、家庭学習の充実を促した。実施については、「てびき」書を作成して、学年毎の適切な学習時間や内容を保護者や児童に示したが、これが保護者・児童の学習への意識を高めた。

2、児童の「規則や決まりを守ろうとする気持ち」を高めることができた。職員室に入室する際には中学生を見習う小学生の姿が多く見受けられる。昨年度末はアンケート「決まりや規則の遵守」が「できた」が 76.1%だったが、本年度は 82.1%になり、きまりや規則に厳しい中学生の姿を見て学んだものと思われる。

3、学校生活についての満足度だが、「小中一貫教育を実施したこの 1 年間の学校行事は充実していた」と考える児童が 85.1%で、昨年度末の 79.4%を上回っている。保護者においても 84.7%がそのように考えている。

◇　2、3、ともに年々ポイントは向上してきている。

●その他

1、学校行事を合同で実施することで、子どもが幅広い人間関係を作ることができたと思われる。中学生が小学生に優しく声をかける姿、下級生から格好良く見られたいという中学生の自尊心の醸成が感じられる。

2、生徒指導上の問題を解決するため、お互いが情報提供・情報共有することは増えた。職員室では校種に関わらず、教職員の話を聞き合い、親身になって解決策を考える気運が生まれている。保護者対応にも互いのノウハウが活かされている。

3、小中学校 9 年間の教育課程を統一した形式で整えたため、教科毎の教育が見通しやすくなった。特に乗り入れ授業を行っている算数・数学、音楽、図工・美術、体育、書写などの指導において、系統性を教員が意識することにつながった。

4、学校行事での小中交流は、子ども同士が自分の成長に気づき、また将来の自分を思い描く場になった。小学生は、中学生をあこがれや目標とする人と見て生活している。

5、小中で授業観察をし、合同研修会を開いた。生活に密着した学習内容で一人一人の子どもの成長を追う小学校、専門的な分野まで踏み込んだ学習内容で子どもに自立を求める中学校、これら小学校と中学校の子どもの違いと教員の指導の違いを理解し合うことができた。また、奈放研研究大会では多くの中学校教員が公開授業を参観した。

6、リーダーとして活躍していた 6 年生は、中学生になったとたんに初心者的立場（ビギナー）になる。6 年生時、担任の指導がなかなか浸透せず、生活態度など改善しなかった子どもが、中学の部活動で、上級生から学んだ目上の人に対する言葉遣いや規律正しさを身につけていく様子を見、リーダーとビギナーを繰り返す体験が、人間形成や社会性を身につける上で必要なことを目の当たりにした。

7、小学校 5・6 年生で授業の一単位時間を 50 分とすることは、中学校への円滑な接続につながり、また、授業時間の 5 分間の延長で、学力の向上が期待できるのではないかとと考える。

※課　題

1、チャイムを小中学校で統一したため、中間休みが取れなくなった。外遊びの減少や体力の低下が現実のものとなった。次年度は校時を弾力的に運用する方向である。

2、教務同士で連携を密にしていたが、中学校と小学校では、指導の内容や方法、重点が少し違う。保護者や地域の大きな期待に応えるためには、教職員の意思疎通を図る組織マネジメントを専属で行う人材（今のコーディネーター体制では不十分）が必要不可欠である。そのため、主幹教諭の配置を希望する。

3、乗り入れ授業のため時間割が複雑で校時変更の幅が少ないため、異学年集団との多様な学習活動ができていない。

4、市教委から提示された生駒北小中一貫教育のイメージを常に念頭において教育課程を編成した。ICT 教育、小中教員の協同による指導等でイメージ図どおりの学校運営ができてきたと考える。しかし、先端大学院大学との連携、理数科教育、部活動、放課後の学力補充等は、今後の課題として残っている。

5、学校と保護者だけでなく、地域も交えて智恵を出し合い、魅力ある学校づくりに努めると共に、校舎見学会の実施や多目的室や大階段の活用など、開かれた学校として地域の活性化につながる役割も果たしていきたい。

6、現在の校区内の児童・生徒数が減少の一途をたどる中、開園した「たかやまこども園」との交流により、先端大学院大学官舎の児童など、新たな人（年長児の入学）の流れをつくる工夫が求められる。地域の願いと大きな期待がかかっている。